三浦堰と三浦八右衛門

二井田のムラの南側を小川が流れているが、これは農業用水路で一〇年ほど前に改修工事が行われ、コンクリートでかためられた立派な水路となった。この水路は三浦八右衛門という人の努力で完成した。明治生まれの人の話では、この水路はもっと曲折していたようで、その曲折は洪水に備え、水の速度と田の畔の強さ、水の温度まで考えた上でのもので、今の科学の知識にもかなう原理によってつくられていたという。

こうした工事を完成させた三浦八右衛門は、山本郡鵜川村の大地主の家に生まれ、何ひとつ不自由のない身でありながら、男一代、世のため人のためになることをしなければと、自分のムラの開拓が一段落すると家を出て、比内の地にきて下川原・赤石・堰崎・板沢・出川などの田畑を、自費と自力でつくりあげた人である。八右衛門はこの地に来た当初から、現在の三浦集落のある台地に目をつけ、何とかしてここに水をひくことができたらと考え続けていた。

八右衛門は犀川から水を引く計画をたてたが、何分昔のことで測量機械もなく、つるはし、鍬と人間の自力をたよるしかなく、ムラ人は工事の完成は困難と反対したり、工事を妨げる者も出てきた。それに冷害の年がつづき、飢饉で餓死する人も出るという状況で、工事どころではない事情もあった。八右衛門は実家から米を運び、金を持ち出して工事をやっとつづけたが、資金も乏しくなり、人夫も思うように集めることができなくなったので藩に援助を請い、藩では八右衛門の事業を藩営として引き継ぎ、六年の年月をかけやっと完成した。この年は記録によると安政五年(一八五八)であるという。工事を終えた八右衛門は、その後、他の土地へ移住していったが、それ以来八右衛門の住んでいた土地を、彼の姓にちなんで「三浦」と呼ぶようになった。これが現在の三浦集落のはじまりであり、八右衛門がつくった用水路を「三浦堰」と呼び、その恩恵で開拓された水田を「三浦水田」と呼ぶようになったという。

この工事にちなんで次のような話が伝わっている。

八右衛門は仕事熱心なだけでなく、他人のための労苦を惜しまず、誰にもやさしい人だった。このような人柄を慕う人尊敬する人も多かったが、工事が進展せず苦慮する八右衛門に、何とか力になりたいと念じたひとりの娘がいて、身のまわりの世話もし心から慕う気持も強かった。工事が天災のため進まず、流失していく土のうや崩れた堤を見て、人々が協力を拒んだ時、その娘は「自分を生き埋めにしてください。竜神となってきっと工事の完成に心を尽します」と懇願したという。娘が本当に人柱になったかどうかは、残念ながら今に伝わっていない。